

ルカによる福音 7章 11-17

7:11 (そのとき) イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。

7:12 イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。

7:13 主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。

7:14 そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。

7:15 すると、死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。

7:16 人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。

7:17 イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

年間第 10 主日 (2013/6/9 ルカ 7 章 11-17 節)

<生き返り>

福音書には 3 人の死者の生き返りの事例が記されています。

一つ目はきょうの福音箇所、ナインのやもめの息子、二つ目は

会堂長ヤイロの娘、そしてベタニアのラザロの生き返りです。ヤイロの娘は死んだ直後、ナインの息子は葬式行列の時、そしてラザロは死んで4日たって墓の中から、と3例は「直後、葬式の最中、墓の中から」と、死んでから生き返るまでの時間がそれぞれ違ってきます。

また使徒言行録にはペトロはタビタを生き返らせ（9:40）、パウロはトロアスの青年を生き返らせたこと（20:7）が記されています。

この手の話を信じる人、信じない人、それぞれいることと思います。こういうことが書いてあるから聖書は信じられないという人もいれば、なに読み飛ばせばいいんだよ、という人もいます。

聖書にもアテネでのパウロの説教がイエスの復活にふれたところでアテネっ子たちは興ざめして引き上げたと使徒言行録に記されています。

<きょうの福音>

きょうの福音ではイエスは二回発言していますが、母と息子のことばは一言もありません。母子ともイエスに感謝のことばをいったはずですが、ルカはそれを省き「死者の生き返り」という衝撃的な出来事の反応を16節で

人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。

とだけ記します。ルカは奇跡物語をたんとと冷静に記録しているように思えます。

<再読 11-14 (本田訳「小さくされた人々のための福音」)>

イエスはナインという町に行った。弟子たちとおおぜいの民衆もいっしょだった。一行が町の門のすぐそばまで来ると、母一人子一人の息子が死んで、運び出されるどころだった。彼女はやもめだった。町の民衆がかなりの人数いっしょに来ていた。主はその母親を見てはらわたをつき動かされ、「泣かなくともよい」と声をかけた。そして歩み寄って棺(かん)を押さえると、かついでいた人たちは立ちどまった。

<語句の説明>

1. 13 節に「主は」とありますが、これは福音書の地の文ではじめてイエスの称号としてでてきます。福音記者ルカは死人の生き返りという出来事を主のはたらき、主イエス・キリストの働きとして記録するためにここで「主」の称号を記したようです。ほかの福音書にはない特殊な使い方です。

2. 「はらわたをつき動かされ」は新共同訳では「憐れに思い」と訳されています。「聖書と典礼」の注記を読みます。

原語では「はらわたが揺さぶられる」という意味の言葉がもちいられている(ルカ 10:33、15:20)

非常に強い同情、憐れみを表すユダヤ的な表現として「はらわた」という単語からつくられた言葉だそうです。

同じ表現がつかわれている、ルカの 10 章は「善きサマリア人」15 章は「放蕩息子」の箇所です。

<三点セット>

主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。

10章の「善いサマリア人」のたとえにはこうありました。

「旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した」(33-34節)

15章の「放蕩息子」のたとえの中にはこうあります。

「まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、吻した」(20節)。

「見る」「憐れに思う」「近づく」は、ルカ福音書の三点セットといえそうです。

見て、はらわたするので、放っておかず、近づいていき、自分にできる精一杯のことをする。ルカ福音書は、愛するとはこういうことだと言おうとしているようです。その愛は何よりもまず、放蕩息子のたとえに示された父である神の愛であり、今日のナインの物語に示されたイエスの愛であり、そして、善いサマリア人のたとえで示されているような、わたしたち一人一人に求められている愛なのです。

この「ナインのやもめ、善きサマリア人、放蕩息子」三つの話で共通しているところがもうひとつあります。

「見る」「憐れに思う」「近づく」という愛の行為が出来事を中心、はなしの筋になるのですが、聖書は愛の行為の相手「一

人息子、ケガ人、弟」の三人ではなく、それぞれ話の中ではわき役の「人々、律法学者、兄」を対象にこれらの出来事を通して愛のメッセージを伝えようとしているようにわたしには思えます。

ただ、今日の箇所では、人々はイエスの愛の業、生き返りを讃えています。母は沈黙したままです。ルカは母の言葉を記録していません。イエスさまに感謝しているのはあたりまえですが、それ以外のおもいが彼女にはあったのでしょうか。

<キサーゴータミー>

仏典にこのような話があります。

インドのある村の、キサーゴータミーという女性は、幼子を亡くし悲しみに身も心も壊れんばかりだった。愛児の死を受け容れられず、死んだ赤子を抱いたまま、「この子を生き返らせて、この子を生き返らせて」と会う人ごとに激しい哀願をかさねるが、もとよりかなわぬことである。見かねたある人がお釈迦さまにたすけをもとめた。

お釈迦さまは、ゴータミーにこのように言った。

「この村の家々をまわって、からしの実をもらってきなさい。ただし、これまで一度も死人を出したことのない家のからしの実でなくてはいけない。それをもらってわたしの所に持ってきなさい。そうすれば、赤子は息を吹き返すだろう」

ゴータミーは勇んで、家々を回った。我が子が生き返ると聞いた彼女は必死だった。

しかし、訪問をうけた家の人たちは、悲しく首を振るだけだっ

た。どの家を回ってもからの実は手に入らなかった。死人を出したことの無い家は一軒もなかったのである。

その時、ゴータミーははっとした。愛するものを失った悲しみはわたしひとりのものではない。これまで、みなが味わってきたかなしみなのだ。その「ことわり」に気づいた時、かなしみは消え、ゴータミーは釈迦の弟子になったという。

「ナインのやもめ」に比べると奇跡がない分、わかりやすいような、わかりにくいような話になっています。

イエスは奇跡をおこしやもめを癒した、釈迦はゴータミーを走らせ、ついに悟りに導いた。

ナインのやもめは一人息子の生き返りを喜んだことでしょう。そして、息子は母を助け二人は幸せに暮らしたことでしょう。一方、ゴータミーも釈尊の弟子となり穏やかな生涯をまっとうしたことでしょう。

<さいごに>

13 節 主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。

かりに、また一人息子が死んで葬式行列の先頭に母が立っていたとしたら、イエスはまた息子を生き返らせるでしょう。そしてまた「もう泣かなくともよい」と慰めてくれるでしょう。

そして、その慰めのことばは、最初の時に気づかなかったかもしれない意味を、母のころにも、息子のころにも響かせることになります。母親は無常を悟るのではなく、信仰による希

望の灯（ともしび）に火をともし、永遠のいのちを讃えること
でしょう。

「もう泣かなくともよい」この言葉がナインのやもめだけでなく、わたしたちの希望のみ言葉となりますように。